正式開設となった入院患児・患者のための「親と子のとしょかん」の紹介

中村雅子
大阪府立母子保健総合医療センター図書館

かつて当施設での方針では、「患者図書サービス」という概念は、皆無であった。開院の翌年、司書は職員より賛同いただける有志を募り、公共図書館からの支援を得ようと企画案を提出したが、当時の事務方からは、「司書は、図書館カウンターに居るのが仕事。本来業務に専念しろ。」と、ことごとく却下された。当時は、公共図書館側もそれほどの熱意は見られず、「要望が皆無なら断念しましょう。」というところで落ち着いてしまった。当時の図書館は、医局に接しており誰が見ても医局員専用図書コーナーの体をなしていた。そこに一般人が出入りするなど、想起すらできなかった。施設内での気運が起こらないうちは、司書が創案する患者向け図書館は、「絵に描いた餅」でしかない。それでも 1992 年の研究所・小児病棟開設時の移転先では、患者図書サービスの機能を持たせようとした。予算要求書作成を一任されて作成したレイアウトには、ひとりの司書で医療者と患者へのサービスができ、かつ双方の動線が重ならないよう配慮したカウンター周りを書き込んだ。

ところが、実際の移転時には、司書の意見は完璧に外され、「新たな要望が起こるような余計なことを云うな。」との圧力がかかり、以後、図書委員会からも外され、結果的には、図書館総面積の４分の１を医局 PC 室とレジデントルーム・会議室に侵食された。

2005 年以後の済崩し的「患者図書サービス」の遂行は、そのベースキャンプを必要としていた。その収容場所とすべく作業をすすめてきた別館図書室の 3 分の 1 を、病棟ボランティアルームに侵食され、せっかく構築してきた蔵書を収容する場がなくなった。図書館内の一番使い勝手の良い書棚に絵本・読み物を並べることにした。図書館内に常設することにより、全職員にその存在を知らしめることに成功。病棟保育担当看護師・病棟保育士・ホスピタルプレイスペシャリスト・チャイルドライフスペシャリスト・ボランティア・院内学級教員へとその要望は波及していく。何よりも職員たちの向こうには、病棟のこどもたちが待って居る。

2007 年 4 月、司書の図書委員会への復帰が実現した。オブザーバーではなく正規委員である。

2008 年 3 月、元 PC 室であった臨床試験支援室が別の場所に新規増築、移転した。そのあとを「親と子のとしょかん」とする、との企画調査室の構想だったのだが、管理部に面していることを理由に、反論が頻発。替わりに企画調査室が入り、地域保健室が元会議室のレジデントルーム大に移動。2 か所に分散していたレジデントルームが元企画調査部に引っ越したのち、ようやく、「親と子のとしょかん」専用室としての、スペースが確保された。3 人目の司書は決まったものの、設備も機能整備もこれからである。未だに病棟から回収されていない絵本たちがあり、未入力書籍もまだまだ残っている。しかし、かつて描きつづけてきた「絵に描いた餅」が巡り巡って、本物の餅として手元に戻ってきた、という感慨は更にひとしおである。